

研究課題	教員が主体的に授業研究をデザインする一人一研究のあり方
副題	～思考ツールと社会関係資本を有効活用した研究～
キーワード	一人一研究、デジタルツール、社会関係資本、映像制作
学校/団体名	公立船橋市立金杉台小学校
所在地	〒273-0852 千葉県船橋市金杉台 2-1-7
ホームページ	<a href="https://www.city.funabashi.lg.jp/gakkou/0001/kanasugidai-e/index.html">https://www.city.funabashi.lg.jp/gakkou/0001/kanasugidai-e/index.html</a>

## 1. 研究の背景

コロナ禍もひとまず落ち着き、免許更新講習も発展的解消となった今、新たな価値観を踏まえ、教師の学びのあり方を見直す時期に来ている。教員は子供たちに「主体的な学び」を推進しつつも、教員自身の学びは依然そうになっていないことが多い。教科の指導法も統一したり、教員一人ひとりの裁量に任せられる主体的な学びになっていない。

内閣府が平成 26 年に発表した、満 13～29 歳の若者を対象とした意識調査によると、日本の若者は、「諸外国と比べて、自己を肯定的に捉えている者の割合が低い」という結果がみられた。自己肯定感が高い子供は、自分の価値や力を信じ、失敗を恐れず挑戦を重ねて成長することができる。また、親の自己肯定感が高いほど、子供の自己肯定感も高くなる傾向があるとされる。

本校は、昭和 46 年の創立後、金杉台団地を中心に一時は 1300 人を超えた児童数も現在はその 5 分の 1、地域も高齢化している。年々子供を取り巻くコミュニティが縮小されてきていることを実感する。地域のコミュニティが縮小されると、子供が魅力的な大人と関わる機会が減ってしまう。子供にとって親以外で密に関わるのは教員であるが、その教員もコミュニティが教員間に限定し縮小傾向にある。子供にとって身近な大人である教員が、魅力的な存在として関わるが必要になってきていると感じている。

## 2. 研究の目的

子供たちの特性も様々で、その学びも多様化している。子供たち一人ひとりの可能性が拓かれることと、教員一人ひとりの可能性が拓かれることは、表裏一体の関係にある。教員自身もまた「個別最適な学び」を実現し、学校の課題や重点目標を自分事として捉え学び続け、自身のキャリアを磨き続ける持続性のある研修内容にしたい。今年度より、「個別最適な『教師』の学び」を実現するために教員が一人一テーマで研究を行う。

## 3. 研究の経過

一人一テーマでの研究による不安を取り除き、新たなことにチャレンジし、自ら学びをデザインできる教員になるために、次の 4 つのアプローチで行うことにした。

- (1) 教員が自分自身をメタ認知し、特性を生かした研究テーマと研究方法を決める時間と場を設ける。
- (2) デジタルツールを活用し、教員の思考を効率的に促し、対話ができる協働的な学びの場を確保する。

- (3) 研究全体をOODAループとして捉える一方、日々の実践を改善実行する。大小のループを両方回しながら追加・修正できるようにする。
- (4) 教員が学校内外において社会関係的資本を身につけられるよう、ネットワークづくりの機会を提供する。

上記(4)の社会関係的資本とは、自校を取り巻く環境を俯瞰して見ることで、地域、他校、保護者、企業との繋がることである。教員自身も授業スキルを高め信頼を得ることにより人的資本を高めつつ、社会関係資本を築いていく。

表1 年間研究計画

時期	取り組み内容	評価のための記録
4月	「個別最適な『教師』の学び」趣旨説明	
5月	<b>Observe (観察)</b> 第1回 「好き」と「得意」から自分をメタ認知する／「学校経営ビジョン」から「ありたい姿」を思い描く <b>Orient (状況判断)</b> 第2回 「ありたい姿」と現状のギャップから問題を見出す	
6月	<b>Decide (意思決定)</b> 第3回 自分の課題を皆にアウトプットし、研究テーマを決める	職員アンケート
7月	第4回 中間発表会 社会関係資本と連携した研修 ・映画監督による校内企業連携体験研修	発表コンテンツ
8月	第4回 中間発表会 社会関係資本と連携した研修 ・企業体験1日研修	
9月	<b>Action (実行)</b>	
10月	第5回～第9回 グループ対話で深め、実践を推し進める	授業発表
11月	社会関係資本と連携した授業	
12月	・千葉大学・企業教育研究会による生成AI読書活動	
1月	・日テレ・映画監督による社会科ニュースづくり	
2月	第10回 研究全体発表会	発表コンテンツ

#### 4. 代表的な実践

OODAループを回すデジタルツールを活用した学び

- (1) Observe (観察) 第1回 「好き」と「得意」から自分をメタ認知する／「学校経営ビジョン」から「ありたい姿」を思い描く (5月10日)

はじめに、低・中・高学年・専科それぞれの教員グループに分かれ、Canvaの付箋に自身の「好き」と「得意」を入力する。入力しながらお互いの情報を共有するだけでなく、Canvaの機能に慣れることもできた。

これら入力した情報は話しやすい話題であることから、初めてコミュニケーションをとるきっかけとしても有効であった。

自身についてアウトプットし、他の職員からフィードバックをもらえることで、自身をメタ認知することができる。

<b>得意</b> バスケットボール ものづくり A教諭	<b>好き</b> 食べること お香 自然 散歩 工作 A教諭	<b>得意</b> 図工作品を作ること C教諭	<b>好き</b> 本を読むこと ダラダラすること 花をいけること ワークショップに行つて何かを作ること C教諭
<b>得意</b> 計算をすること 笑うこと B教諭	<b>好き</b> 寝ること 運動すること 漫画を読むこと ゲームをすること 子供と遊ぶこと B教諭	<b>得意</b> 料理（煮物・唐揚げ） D教諭	<b>好き</b> 小田和正 テニスをする 高いところ 動物 D教諭

図1 「好き」と「得意」のCanva付箋画面

次に、研究主任により提示された研究主題「一人ひとりが主体的に学び、『よさ』を高めあう児童」をもとに、各自がイメージする児童の姿を「Canva」の付箋に各自入力する。入力後、「Canva」のAI機能を使い、トピック分類を行った。AIによる分類をそのまま鵜呑みにするのではなく、この分類結果を元に再分類したり、付箋を入れ替えたりしながら対話を行うことで、目指す児童像を深めていく。実物の付箋を用いると、分類に物理的な作業をしなければならず時間がかかる。デジタル付箋をAIで分類することにより対話に時間をかける事ができた。

<b>自己表現</b> 課題に対して、自分なりの考えを持つ E教員	考えたことを自分なりの言葉で発表したり、ノートに書いたりできる E教員	<b>自己表現学習計画と目標</b> 自分で学びたいことをみつける F教員	知りたいことが何か、どう調べるのかなど計画を立てる F教員	<b>自己表現学習計画と目標</b> 一方ではなく、双方向（友達の見解・発表に対してリアクション） I教員	全員が参加している（お客様がない） I教員
自分の考えを言語化して伝え合う F教員	自分に今どんな力が必要かわかる どの力がついたのか認知できる F教員	学習のゴールを意識して取り組む F教員	学習の狙いから逆算して学習の道筋を考える事ができる E教員	振り返りを書く→全体で共有 G教員	対面的な学習（グループ活動から新しい学びを得る） G教員
<b>相互理解</b> 友だちの考えから自分の考えを変えたり、付け足したりできる E教員	自分と違う意見や考え方について、考える ・比較する ・共通点を見つける ・そもそもそれがどういう考えなのかわかる F教員	<b>自己表現学習計画と目標</b> 問題を見つけ、自分で進んで調べ、まとめることができる E教員	授業の目標・めあてをもって活動に取り組む I教員	つぶやきから授業を広げる（子どもが他の子のつぶやきをひろう） G教員	
自分の中の「よさ」を認め、友だちの「よさ」も認めることができる。 E教員	分からないことをそのままにしない→友達、先生から学ぶ G教員		静と動 静：じっくり考える 動：話し合いや表現活動など I教員		

図2 ありたい姿をCanvaのAI機能でトピック分類

(2) Orient (状況判断) 第2回「ありたい姿」と現状のギャップから問題を見出す(5月20日)

前回の研究会で教員一人ひとりが持った「ありたい姿」と、4月から実際に目の前にしている

児童の実態を比べ、そのギャップから課題を見出す。

各々の課題を明確にするため、個々でロジックツリーを描き分類・整理を行なっていく。ロジックツリーは、「Lucidchart」というアプリを使うことで簡単に図を作成し書き換えもできた。ロジックツリーで考えるには、グループ対話だけでなく個人でじっくりと考える時間でもある。生成AIも活用し思考の壁打ち相手にし、思考を深めていく教員もいた。

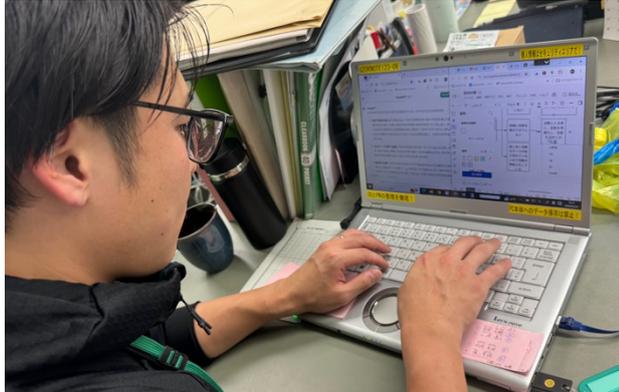


図3 生成AIに問いながら Lucid Chart に入力

ロジックツリーを描く経験はほとんどの教員が初めてであったため、作業スピードには差がみられた。しかし、お互いのロジックツリーを共有して見ることで思考の仕方が理解できたようである。

以下、ロジックツリーを有効に活用できていた教員の内容を図4に示す。自身の目標から、児童の姿をイメージし、その手立てを分岐させて考えている。

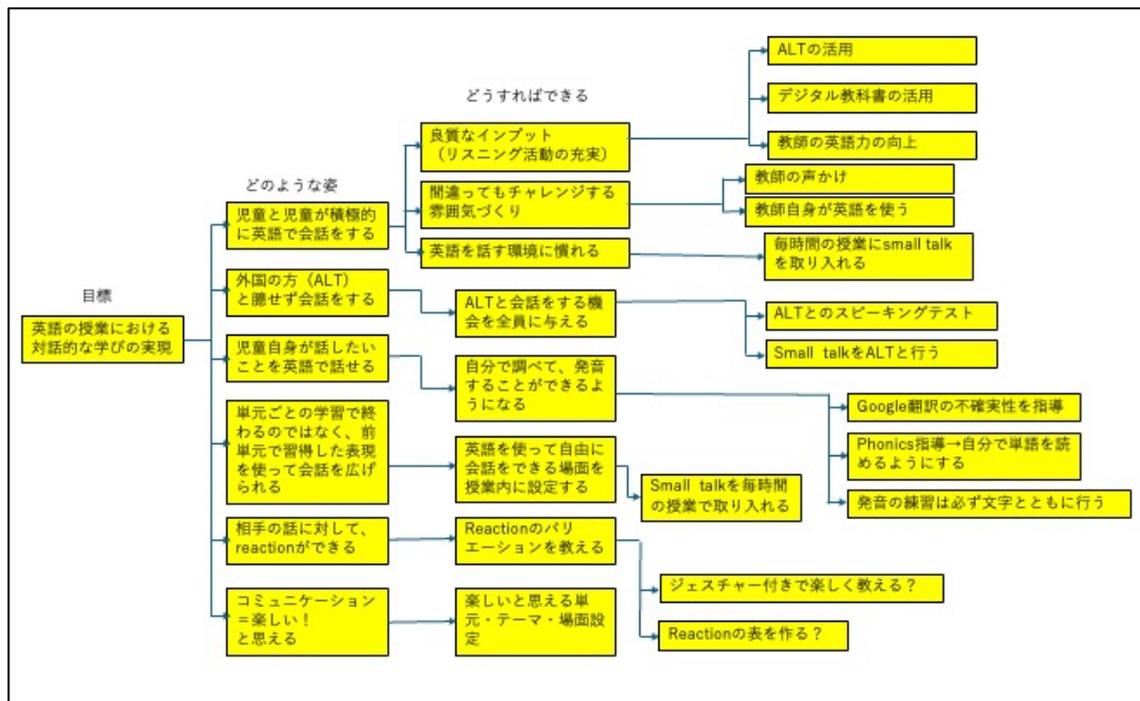


図4 ロジックツリーで手立てを具体化していく

(2) Decide (意思決定) 第3回 自分の課題を皆にアウトプットし、研究テーマを決める  
 /第4回 中間発表会 (7月28日)

各自研究テーマを決め研究計画を立てた。これまでのグループを解体し、テーマから再編成を行なった。

表2 全教員当初の研究テーマ

グループ	教員	研究する教科・テーマ	研究授業発表・外部講師
1	A	ウェルビーイングの視点を意識した、児童へのかかわり方、考え方の探求	
	B	【全教科】 自己調整力。将来に向けて自分で自分を育てる力をつける	
	C	【外国語】 学級経営・ソーシャルスキルトレーニングの視点を取り入れた英語科の学習	9月～12月 指導課
	D	【音楽科】 音楽の授業において、聴覚と可視化された教材との双方をバランスよく使い、すべての児童にその両方が結びつく授業をする	
2	E	【道徳】 特別の教科 道徳において、「本質に迫る問い」をすることで、児童全体が自分の考えを表現できる授業づくり	
	F	【算数科】 算数的活動を通して、「わかる・できる」の楽しい授業づくり ～具体物の操作から、考えを深く理解につなげる学び～	1月 元校長
	G	【社会科】 一人一人が楽しみながら学び、「できた」という思いをもたせる学習	
	H	【社会科】 グループ学習を行うことによる児童の学力向上について	10月
3	I	【生活科】 知的好奇心あふれる授業づくり ～自分の願いをもって、ともによさを認め合う活動をする手立ての工夫～	
	J	【生活科】 手を使った作業・動作をたくさん取り入れて達成感を味わわせる。	
	K	【図画工作科】 子ども一人一人が思いを豊かに表現する学習 ～子どもが夢中になれる題材を求めて～	2月 元校長
	L	【社会科・全教科】 絵本などを用いて児童の意欲や興味、必要感を高める単元の導入 ～児童がやりたい！調べたい！考えたいと思えるような単元導入の工夫～	
	M	【総合的な学習の時間】 一人一人が興味をもったことを調べ、わかったことをみんなに伝える活動を通して、学びを深めよさを認め合う授業をめざして	
4	N	【学校経営】 子供たちが社会や未来に対し、ワクワクするような学びの環境づくり	企業教育研究会
	O	【全教科】 各教科において、タブレット端末を積極的に活用した授業の実践	
	P	【国語科】 表現力を向上させ、コミュニケーションを円滑にとれる児童の育成	1月 千葉大学
	Q	【理科】 論理的に考える → 生活とつながる理科	

研究する教科とテーマ、研究の具体的な進め方を一人ひとりが3分内で発表した。それぞれの発表前後に聞いている教員は Canva の付箋にフィードバックを記入する。発表する教員すべての画面をあらかじめ作っておき、それぞれの画面の付箋に発表を聞きながらフィードバックを入力していく。これまでのように意見のある職員が発表をすると時間もかかり、限られた教員の

話になりがちである。Canva を使ってリアルタイムに入力することで、発表前後 5 分程度で全ての教員からフィードバックを受ける事ができ、時間を有効に活用できるだけでなく、聞いている教員も相手の発表を自分事として捉える事ができた。

(3) Action (実行) 第 5 回～第 9 回 グループ対話で深め、実践を推し進める

研究テーマは途中で修正を行うことも良いこととして、実践と修正のサイクルを回すことを推進した。

6 年生は千葉大学の学生と DELL コンピュータ CEO による生成 AI の授業を実施した。子供たちが読書して入力した本のデータ（登場人物、作者、ページ数、要約等）をもとにした金杉台小学校オリジナルの読書生成 AI をもとに本を検索できるシステムを構築した。

教員は、そのデータをもとに 6 年生の子供たちがその生成 AI システムを使い、1 年生に好みの読み聞かせの本を探す学習に発展させた。例えば、1 年生が「うさぎが登場する本を読みたい」という希望があれば、システムに条件を入力すると図 6 のような情報が表示される。この授業は、社会関係的資本を自身の研究に生かした実践モデルとなった

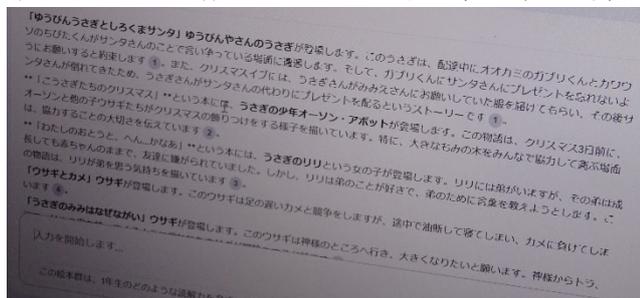


図 5 金杉台小オリジナル生成 AI 読書システム

研究全体発表会（2 月 17 日）では、一人一研究に取り組んだすべての教員が発表をした。発表は、パワーポイント、ロイロノート、Canva と自身の発表にあわせたデジタルツールを選択していた。中間発表の時と同様、発表と並行して聞いている教員は Canva の付箋に感想や意見を入力していく。発表後には全ての教員のフィードバックを終え効率化も図れた。

5. 研究の成果

本校では、17 人の教員が一人一研究に取り組み発表したが、教員経験のバランス、社会関係資本との連携への積極性、ICT 活用など新しい技術の導入への積極性から教員を選定し、個人にインタビューを行い、その成果と課題を以下にまとめる。

表 2 教師の実践とインタビューにおける主な発言

教員	教科とテーマ・内容	主な発言
① 20 代 1 年生担任	(算数) 算数的活動を通して、「わかる・できる」の楽しい授業をつくる ・具体物・反具体物の操作により数感覚を確かなものにする ・タブレットの活用	・1 校目 2 年目なので、これまで相談できる教員は校内に 3 名程度。他校に 1 人。しかし、グループ対話型研修により、他学年とも話ができるようになってきている。現在 5 名程度。 ・授業は 1 回きりなので、挑戦しても失敗するのが心配。まずは算数から自分の指導の柱となるものをつくっていきたい。
② 30 代	(外国語) 学級経営・ソーシ	・一斉形式の研究授業では取り上げられにくい

<p>6年生担任</p>	<p>チャルスキルトレーニングの視点を取り入れた英語科の学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年間毎時間 Small Talk を取り入れる。</li> <li>・Canva、ロイノートを児童が選択し、自己表現する授業の実践</li> <li>・複数 ALT と連携したオンライン・ブレンディッド</li> </ul>	<p>外国語を研究する事ができ、1年間実践して自信をつける事ができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一研究は自由度があり、苦ではない。高学年にとって外国語は子供達と同じ土俵で学びやすい。</li> <li>・ICT活用という「いいキッチン」を得られた。</li> <li>・自信が持てる教科があることにより、自己有用感が持てる。教師としての拠り所ができた。</li> <li>・ソーシャルスキルのうち、有意な向上が見られたのは、「解読スキル」「主張性スキル」「記号化スキル」の3項目。</li> </ul>
<p>③ 40代 6年生担任</p>	<p>(国語) 図書室 AI をつくろう！～目的意識をもった本との関わり～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・千葉大学学生や DELL コンピュータ CEO と協働研究</li> <li>・6年生が1年生に読み聞かせをするための本選びにおいて図書室 AI も活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・AI ツールは図書選びにおいて非常に有効であった。従来の方法では人に聞くかランダムに選ぶしかなかった。</li> <li>・1年間かけてトライ&amp;エラーを繰り返し、柔軟に対応しながら研究を進める事ができた。</li> <li>・外部連携を「一緒にやってもらえる」と捉え、負担を軽減し、効果的に授業を進める事ができた。</li> </ul>
<p>④ 40代 2年生担任</p>	<p>(図工) 子ども一人ひとりが思いを豊かに表現する学習～子ども達が夢中になれる題材を求めて～</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自ら退職校長を講師に呼び、個別に指導を受ける</li> <li>・低学年グループで図工研修を企画する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内グループの話し合いを通じて、困っていることを相談し合う学びの時間を確保できた。</li> <li>・自身が招聘した講師より、文章では得られない実際の指導方法や過去の作品を見せてもらうことで、具体的な指導の仕方や視点を学ぶことができた。</li> <li>・材料が一人分揃っている「パッケージ教材」に頼らず、自身で材料を選定し、ダイナミックな共同制作物ができた。</li> </ul>
<p>⑤ 60代 音楽専科</p>	<p>(音楽) 音楽の授業において、聴覚と可視化された教材との双方をバランスよく使い、すべての児童にその両方が結びつく授業をする</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自作した演奏動画の活用</li> <li>・デジタル教科書やシンセサイザーを使った授業や、Google Earth などを使った</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで専科教員は校内授業研究において、蚊帳の外になることも多かったが、普段取り組んで実践をアウトプットできた。</li> <li>・グループ対話において、様々な学年や他教科の実践や課題、普段の児童の姿を知る事ができ自身の音楽授業を教科横断的に進める事ができた。</li> <li>・教員の前に企業経験があり、新しいものを取り入れることに抵抗がないため、一人一研究の日々の取り組みにデジタル活用を積極的に取り入れ</li> </ul>

	音楽の歴史的背景と繋げた鑑賞	やすかった。
--	----------------	--------

また、これまでの1年間の研究データをPadletで一覧できるようにした。これにより、現在OODA ループのどの段階を進めているのか見通す事ができる。また、研修で活用したCanvaのデータや教員それぞれが作成したデータも共有できた。



図6 Padletで1年間のOODAループを見通しデータを共有

## 6. 今後の課題・展望

2月の発表でよかったと満足して終わるのではなく、問題を次の課題にし、改善点を模索し、持続的に取り組めるようにしたい。そのためには、今年度の研究をどのような視点で振り返りをするか考えていく必要がある。研究グループにはメンターを設けたが、まだグループ対話の進行役にとどまっている。今後は、教員間で効果的な対話を促すことができる人材を育てていきたい。

そこで、ファシリテーション力を高めるために必要なスキルを示すなど、ファシリテーターの育成にも力を入れていきたい。

## 7. おわりに

校長、教頭、主幹教諭、専科教諭もまた個別テーマを設けて一人一研究を進めていた。若手だから、ベテランだからという垣根を越え、教員個々が学びをアウトプットし、お互いに特性を尊重しあい、学び合える関係性を築いていくことが教員全体の人材育成をしていく上で大切であると考える。教員自身が自分の敷いたルールの上を、自分を高めるために進むのである。

「世の中には、自分もそうなりたいと思う素敵だなと思う大人がいる」というアンケートに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた児童は92.0%であった。児童にとって目の前にいる大人の代表である教員の生き生きと学ぶ姿が、児童に良い影響を与えたのではないだろうか。

## 8. 参考文献

- ・ 桑田耕太郎、田尾雅夫 (2021) 『組織論 (補訂版)』、有斐閣